

平成 30 年 6 月 4 日現在

機関番号：16301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K13235

研究課題名(和文) 特別活動における道徳性育成方策に関する研究

研究課題名(英文) Research on morality development in Extraclass Activities

研究代表者

城戸 茂(Kido, Shigeru)

愛媛大学・教育学研究科・教授

研究者番号：00591091

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：特別活動における道徳教育の充実方策に関する研究の主な成果は、次の3点である。

1点目は、特別活動の指導の成果の一端を見ることができ社会性測定用尺度を開発できたこと、2点目は、開発した尺度を活用し教師が自律的に進める社会性を育む特別活動指導改善プログラムを開発できたこと、3点目は、中学生の社会性育成状況を調査しその結果から効果的な指導の在り方に関する示唆を得ることができたことである。得られた主な示唆は次の3点である。教職員の共通理解、共通実践が重要であること、長期的な視点で取り組むこと、進級時の指導が効果的であることである。

研究成果の概要(英文)：The main result of research on morality development in Extraclass activities is three points of the next.

The first point is that I was able to develop a measurement scale for sociality that can watch one end of the result of the instruction of extraclass activities, the second point is that I was able to develop an extraclass activities instruction improvement program that pushes forward autonomously, the third point investigate the social nature upbringing situation of the junior high student and were able to get the suggestion about the way of effective instruction from the result. The provided main suggestion for instruction is three points of the next. It is that common understanding of the staff of a school, common practice being important, wrestling in a long-term viewpoint, instruction at the time of the promotion are effective.

研究分野：生徒指導 特別活動

キーワード：特別活動 道徳教育

1. 研究開始当初の背景

学習指導要領において、道徳教育は道徳性の育成を目標に、全教育活動の中で実施することが示されている。中でも特別活動は、道徳的実践の指導の重要な場として位置付けられている。さらに、平成27年3月の学習指導要領一部改正により「道徳」の「特別の教科」化が図られた中、『小(中)学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』において、道徳教育は、最終的には行為・行動まで求めるものであるという認識が示されたことにより、日常生活における道徳的実践の指導の重要な機会と場である特別活動への期待も一層高まってきている感がある(杉田、2015)。

しかし、特別活動は一般的に道徳性の育成に貢献すると言われてはいるものの、道徳教育として成果を挙げていくための具体的な方法が共有され、効果的な取組が進められている状況にあるとは言い難い面がある。

2. 研究の目的

特別活動において身に付けさせたい道徳性は、例えば、よりよい人間関係を築こうとする態度、集団の一員として自己の役割や責任を果たして生活しようとする態度など、集団活動を通して身に付いていく社会性と言われてはいるものである。

本研究では、特別活動の目的の中核とも言える社会性の育成状況を測る尺度を作成したうえで中学生の状況を一定期間調査し、その結果をもとに有効な指導改善プログラムを作成することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 社会性測定用尺度の開発

国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センターにおいて、学校教育で育成を目指す社会性の育成状況を把握するための「社会性測定用尺度」を開発している(国立教育政策研究所生徒指導研究センター、2004)。本尺度は、特別活動の中で実施されることの多い、異年齢の交流活動や体験活動の成果を見るために開発されていることから、本研究においても、本尺度を活用する。さらに、特別活動の指導の成果を見取る観点から検討を加え、公立中学校での調査を実施しその有効性を検証する。

(2) 中学生の社会性育成状況の調査

1年間の生徒の社会性の月別変化

公立中学校において、開発した社会性測定用尺度を活用して、社会性の推移を夏季休業となる8月を除き毎月学年別に調査し、その結果を踏まえ、推移の傾向を明らかにするとともに効果的な特別活動の指導の在り方を検討する。

複数年にわたる生徒の社会性の変化
市街地、郊外、中山間地域に位置する公立

中学校において、開発した社会性測定用尺度を活用して、学年別に社会性の推移を原則年度当初と各学期末に調査し、その結果を踏まえ、推移の傾向を明らかにするとともに効果的な特別活動の指導の在り方を検討する。

(3) 指導改善プログラムの開発

社会性測定用尺度による調査結果を手掛かりに、振り返りシートを開発して特別活動をはじめとする社会性の向上に向けた取組の改善方策を学年部単位で検討する取組を進め、その結果を手掛かりに教師自らの手で進める「社会性を育む特別活動指導改善プログラム」を作成する。

4. 研究成果

研究の主な成果は次の3点である。

(1) 社会性測定用尺度の開発

本研究では、国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センターが開発した社会性測定用尺度を基に、特別活動の評価に資することを意図して、特別活動で重視している「話し合い活動」や「自治的な活動」に関する項目として、「私は、クラスで決めたことについて、進んで取り組んでいます。」「私は、クラスの前で、自分の考えをしっかりと話すことができます。」「私は、係や委員として、自分の出番が来たと思った時には、指示するなどしてクラスの人を動かすことができます。」「私は、クラスの他の人のクラスや学校での役割を理解し、相手の立場を尊重しながら協力しています。」の4項目を加え、次の4領域計49項目からなる尺度を開発した。4領域は、「自分自身の社会性や適応」に関する項目群(8項目)、「学級内の人間関係上に現れた社会性」に関する項目群(16項目)、「他学年との人間関係上に現れた社会性」に関する項目群(16項目)、「大人との人間関係上に現れた社会性」に関する項目群(9項目)である。さらに、開発した尺度を活用して公立学校において調査を行い、その有効性を検証した。なお、尺度の全容は『愛媛大学教育実践総合センター紀要 第35号(2017)』pp.86-87を参照されたい。

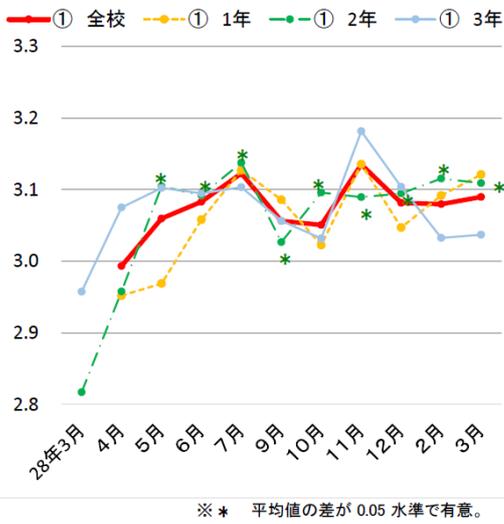
(2) 調査結果を踏まえた効果的な指導法

1年間の中学生の社会性の月別変化

図1は、平成28年度に市街地に位置する全校生徒537人の公立中学校において、開発した尺度を用いて1・2・3年生を対象に行った調査のうち、特徴的な結果が見られた「他学年との人間関係上に現れた社会性」の領域の調査結果を示したものである。

本調査結果から明らかになった社会性の推移の傾向として、次の3点を挙げることができる。1点目は、学級内、他学年、大人との人間関係を通して育まれる社会性は1・2学期末にピークが見られること、2点目は、年度替わりの時期に社会性の一段の向上が見られること、3点目は、社会性は1年間の

他学年との人間関係上に現れた社会性



〔図1 社会性測定用尺度で見た他学年との人間関係上に現れた社会性に係る平均得点の月別推移〕
 中で上下動を繰り返し、1年間で見ると上昇傾向が見受けられるものの、4月当初と年度末を比較すると、有意に高まっている状況にはないことである。

また、社会性の推移の状況を踏まえた特別活動の効果的な指導の在り方として、次の2点を挙げる事ができる。1点目は、年度替わりの時期に社会性の一段の向上が見られたことから、進級に伴い集団の中での立場が異なることが社会性の向上に大きく関わっていることを踏まえ、年度替わりの時期に他学年と関わる活動の工夫・充実を図ること、2点目は、特別活動の成果は短期間ではあまり明確に現れないものの、活動期間の長い1・2学期には社会性の高まりがみられることから、ねらいを明確にし、質の高い取組を重ねることが必要であることである。

複数年にわたる中学生の社会性の変化

本研究においては、平成28年3月から平成30年3月の間、市街地や郊外、中山間地域に位置する規模の異なるAからFの6つの公立中学校における1・2・3年生を対象に原則年度当初及び各学期末に調査を実施した。なお、開始時期は学校によって異なる。

表1は、調査期間が2年余りと最も長く、図1で示した資料を得た公立中学校の調査結果を一例として示したものである。本調査結果から明らかになった社会性の推移の傾向として、次の3点を挙げる事ができる。1点目は、単年度で有意に社会性の向上が見られた領域が1学年、1領域以上あった学校は6校中2校であったのに対し、1年を超えるスパンで見た場合に、有意に上昇した領域が1学年、1領域以上あった学校は6校中5校であったこと、2点目は、有意に上昇した

領域が見られる学校では、上昇した領域が見〔表1 C中学校における社会性の推移〕

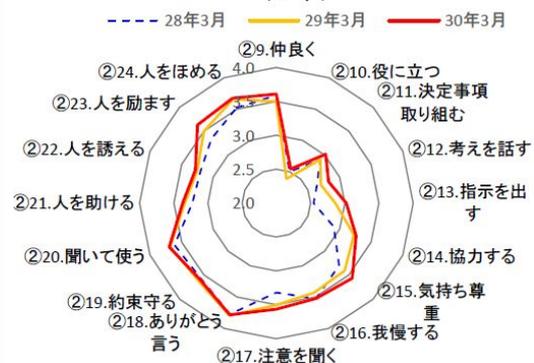
〔C中学校〕

自分自身の社会性や適応				学級内の人間関係上に現れた社会性			
	1年	1年		1年	1年	1年	
	2年	3年		2年	3年	3年	
28年3月	-	2.85		28年3月	-	3.05	
28年4月	-	-		28年4月	-	-	
7月	3.10	2.88		7月	3.32	3.10	
12月	3.02	2.93		12月	3.32	3.17	
3月	3.04	2.96		3月	3.26	3.15	
29年4月	3.06	3.06	*	29年4月	3.30	3.25	*
7月	2.96	3.01		7月	3.25	3.21	
12月	3.03	3.04		12月	3.29	3.21	
3月	3.07	-		3月	3.29	-	

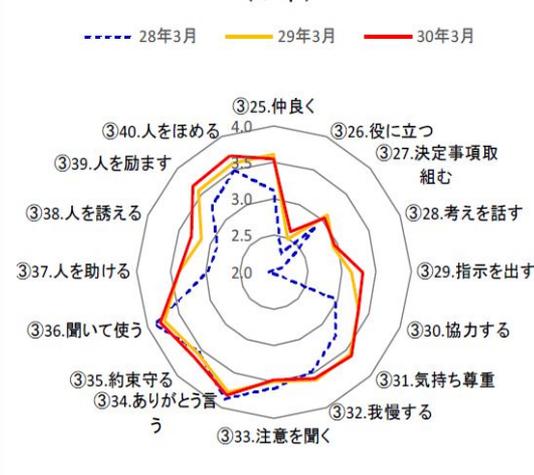
他学年との人間関係上に現れた社会性				大人との人間関係上に現れた社会性			
	1年	1年		1年	1年	1年	
	2年	3年		2年	3年	3年	
28年3月	-	2.88		28年3月	-	3.03	
28年4月	-	-		28年4月	-	-	
7月	3.20	3.11	*	7月	3.30	3.22	
12月	3.13	3.08		12月	3.25	3.17	
3月	3.16	3.09	*	3月	3.27	3.21	
29年4月	3.21	3.22	*	29年4月	3.28	3.29	*
7月	3.16	3.14	*	7月	3.23	3.23	*
12月	3.19	3.16	*	12月	3.29	3.25	*
3月	3.24	-		3月	3.24	-	

分散分析は最初の調査を起点に実施。
 * 平均値の差は0.05水準で有意。

②学級内の人間関係上に現れた社会性 (3年)



③他学年との人間関係上に現れた社会性 (3年)



〔図2 社会性測定用尺度で見た中学3年間の変化 (D中学校)〕

られる学年の「他学年との人間関係上に現れた社会性」を尋ねる領域が共通して上昇していること、3点目は、学校規模や所在地による特徴は見られないことである。

図2は、中山間地域に位置する小規模校の平成29年度の3年生について、当該生徒の各学年時の3月時点の調査結果の一部をレーダーチャートで示したものである。これを見ると、社会性の推移の傾向として、1年生の終わりから2年生の終わりにかけて、「学級内の人間関係上に現れた社会性」及び「他学年との人間関係上に現れた社会性」の領域における「自分の考えをしっかりと話す」、「係や委員として指示を出す」、「相手の立場を尊重しながら協力する」といった特別活動で重視したい「社会参画」に関する項目を中心に、大きく数値が上昇していること、また、大きく上昇している項目は、「他学年との人間関係上に現れた社会性」を尋ねる領域に多く見られることが分かる。

また、社会性の推移の状況を踏まえた特別活動の効果的な指導の在り方として、次の2点を挙げることができる。1点目は、社会性の育成に当たっては、長期的な視野に立って、社会性の育成を目指す特別活動を中心に、粘り強く取り組んでいくことが必要であること、2点目は、4つの領域のうち「他学年との人間関係上に現れた社会性」を尋ねる領域において成果が現れやすいことを踏まえ、特別活動等において異学年との交流活動を効果的に実施していくことが大切であることと言える。

(3) 社会性を育む特別活動指導改善プログラムの開発

◆社会性調査結果の活用 (平成29年度 12月調査) [〇〇立 A中学校 1年部]

貴校の本年度の「学校の教育目標」の達成に向けて、学年部単位で本調査を活用してみてください。

学校の教育目標 「 (例) 」

- 前調査結果を踏まえて設定した重点項目の結果を見て、その詳細を行い、結果の主な要因をみながら振り返ってみよう。
- 振り返りを踏まえ、次回調査に向けての重点項目を3つ以内で選択し、重視したいものに「今回の重点」記入してください。
- 「2」で選んだ重点項目の数値を上げるために、次の調査までの間の「学校行事」や「生徒会活動」、「日々の活動」等の中で特に重点を置きたいものを3つ以内を選び、どんな点に力を入れて実施するか、その行事や活動ごとにできるだけ具体的に記入してください。

前回調査で設定した重点項目	今回の重点項目	重視したい行事や日々の活動等	力を入れたいこと (工夫点)
第1重点 (番号 ①-2) 【詳細】※数値に○ 3.上昇 2.ほぼ同じ 1.下降 主な要因	第1重点 (番号 ①-2) 授業が分かる	授業 家庭学習 朝ドリル	細かい学習課題の提示、聞き合う場面の設定、結果における振り返りの場の設定 家庭学習の手引きの活用 意義や目的を自覚させて取り組ませる。
第2重点 (番号 ②-10) 【詳細】※数値に○ 3.上昇 2.ほぼ同じ 1.下降 主な要因	第2重点 (番号 ②-15) 気持ちを尊重	働く人に学ぶ会 部活動 委員・係り活動	講師や周りの生徒の気持ちに配慮して活動させる。 他の部員の気持ちを思いやりながら活動させる。 仕事を確実にを行い、全体への貢献度を自覚させる。
第3重点 (番号 ③-26) 【詳細】※数値に○ 3.上昇 2.ほぼ同じ 1.下降 主な要因	第3重点 (番号 ③-26) 他学年の役に立つ	少年式 卒業式 委員・係り活動	上級生のために、与えられた役割に一生懸命取り組ませる。 上級生のために、与えられた役割に一生懸命取り組ませる。 委員会の活動に積極的に参加させる。

※ 重点項目を参照して、学年部内で共通認識をもち、みんなの先生で気持ちをそろえて共通実践をしてみよう。
※ 1部1部ごとにご提出ください。なお、記入欄が不足する場合は、用紙を追加して頂いても構いません。

【図3 振り返りシートの例】

社会性の育成といった健全育成の取組を進めていくためには、全教職員による共通理解、共通実践が重要である。このことについて、長年にわたり生徒指導推進において未然防止の取組を進めてきた国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センターでは、年度途中に点検・見直しを複数回実施すること

で、個々の教職員の思い込みや認識のずれが修正され、共通理解による実践が進むことを明らかにしている(国立教育政策研究所、2017)。こうした先行研究を踏まえ、調査最終年度となった平成29年度に、調査対象校に対し、調査結果が出る度に学年部毎に振り返りを行ってもらった。その際に、図3に示したようなシートを活用してもらったこととした。その結果、丁寧に振り返りを行った学年の結果が他と比べて好ましい変化が見られることを確認することができた。

こうしたことを踏まえ、1年間の流れの中で教師自らの手で進めるプログラムとして整理したものが、図4に示した「社会性を育む特別活動指導改善プログラム」である。

4月	社会性測定用尺度による実態把握、学年部毎の課題設定と1学期の重点計画の策定	[P]	第一サイクル
5月	計画に沿った実践、計画の調整	[D]	
6月	↓		
7月	社会性測定用尺度による実態把握	[C]	第二サイクル
8月	1学期の取組の振り返り、学年部毎の課題設定と2学期の重点計画の策定	[A][P]	
9月	計画に沿った実践、計画の調整	[D]	
10月	↓		第三サイクル
11月	↓		
12月	社会性測定用尺度による実態把握	[C]	
	2学期の取組の振り返り、学年部毎の課題設定と3学期の重点計画の策定	[A][P]	
1月	計画に沿った実践、計画の調整	[D]	
2月	↓		
3月	社会性測定用尺度による実態把握	[C]	
	3学期及び1年間の取組の振り返り、学年部毎の課題設定と次年度の重点計画の策定	[A][P]	

【図4 社会性を育む特別活動指導改善プログラム】

教育課程に位置づけられている特別活動は、社会性や豊かな人間性を育むうえで大きな役割を果たすことが期待されている。しかし、その成果はすぐには現れてこなかったり、現れたとしても一時的なもので終わったりすることもあるため、教師の指導に対する意識が継続されにくく、ややもすると取組が後回しにされていく傾向が見受けられる。しかし、今日、子どもたちの人間関係形成能力をはじめとする社会性の育ちに関する課題が多く指摘されている中、特別活動に対する期待もこれまで以上に大きくなってきている。こうしたことから、特別活動の指導の質をさらに高め、成果を挙げていくことが求められ

ている。

教育指導の成果を挙げていくためには、指導の質を高めていくことが必要であり、そのためには指導の成果を把握しながら指導の改善を図っていくことが重要である。しかし、教科学力と比べ、人間性の育成を担う特別活動の成果を把握することは難しく、これまでは指導に当たる教師の勘や経験に頼ることが多かったきらいがある。折しも、平成 29 年に告示された新しい学習指導要領では、特別活動においても育成すべき資質・能力の明確化を図り、一人一人の子供に資質・能力を着実に身に付けていくことがこれまで以上に求められることとなった。本研究では、特別活動で育成を目指す重要な資質・能力の一つである社会性の育成状況を把握する尺度を開発し、尺度を活用した調査結果を手掛かりに指導の改善方策を教師集団の中で主体的に検討することで成果を高めていく「社会性を育む特別活動指導改善プログラム」を作成した。今後、本研究で作成したプログラムについて、実践を通してその精度を高めていきたい。

<引用文献>

杉田洋、心を育て、つなぐ話し合い活動 第 8 回道徳的行為と道徳性の指導の関連を図る、道徳と特別活動、2015.11、文溪堂、p.38

国立教育政策生徒指導研究センター、「社会性の基礎」を育む「交流活動」・「体験活動」～「人とかかわる喜び」をもつ児童生徒に～、2004、pp.82-83

国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター、「PDCA×3＝不登校・いじめの未然防止～点検・見直しの繰り返しで、全ての児童生徒に浸透する取組を～」、2017、p.9

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

城戸 茂、中野 澄、藤平 敦、中尾 走、社会性測定用尺度を活用した特別活動指導改善プログラムの開発、愛媛大学教育実践総合センター紀要、査読無、第 36 号、2018、pp.81-87

城戸 茂、中野 澄、藤平 敦、社会性測定用尺度で見た中学生の変化と特別活動の可能性、愛媛大学教育実践総合センター紀要、査読無、第 35 号、2017、pp. 85-92

城戸 茂、中野 澄、藤平 敦、特別活動における道徳教育充実方策に関する一考察～社会性測定用尺度の開発と指導の方向性の検討～、愛媛大学教育実践総合センター紀要、査読無、第 34 号、2016、pp. 87-94

〔学会発表〕(計3件)

城戸 茂、時系列でみた中学生の社会性の変化～特別活動の実践への示唆～、日本特別活動学会 第 26 回東海大会、2017.8.28、

城戸 茂、特別活動における道徳教育充実方策に関する一考察～社会性測定用尺度の開発と指導の方向性の検討～、日本特別活動学会第 25 回大会 - 25 周年記念南関東大会 -、2016.8.28、

城戸 茂、特別活動における道徳性育成に関する一考察～学習指導要領等に見る道徳教育との関係の変遷を踏まえて～、日本特別活動学会第 24 回近畿大会、2015.8.23

6. 研究組織

(1) 研究代表者

城戸 茂 (KIDO Shigeru)
愛媛大学教育学研究科・教授
研究者番号：00591091

(2) 研究分担者

中野 澄 (NAKANO Kiyoshi)
国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター・総括研究官
研究者番号：70741940

藤平 敦 (FUJIHIRA Atsushi)
国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター・総括研究官
研究者番号：60462157